

2019 年 10 月 13 日（日）「慰めの根拠」

ローマ 14:7-8

7 私たちの中でだれひとりとして、自分のために生きている者はなく、また自分のために死ぬ者もありません。8 もし生きるなら、主のために生き、もし死ぬなら、主のために死ぬのです。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。

ハイデルベルク信仰問答より

問1 生きている時も、死ぬ時も、あなたの唯一の慰めは何ですか。

答え 生きている時も、死ぬ時も、身も魂も(ローマ 14:8)、私自身のものではなく(I コリント 6:19-20)、私の信頼する救い主イエス・キリストのものである(I コリント 3:23)ということでもあります。

今月から祈祷会にて『ハイデルベルク信仰問答』を学び始めました。まだ手探りではありますが、信仰問答そのものを読むだけではなく、解説の本も輪読して理解を深めています。そもそも信仰問答書とはどういうものなのか。これを学ぶことにどんな意義があるのか。そのことを皆様にもお伝えできるように、一度説教の場で語ってみることにいたしました。

信仰問答（Catechism）というのは、「キリスト教の教理を分かりやすく説明した要約ないし解説」（Weblio）であり、16 世紀宗教改革時代にプロテスタント教会内で多く生み出されました。幾世紀にも亘って基準とされてきたカトリックの神学に対し、プロテスタントの立場を明確にする必要があったのです。ドイツの町ハイデルベルクにおいても、当時のプファルツ選帝侯¹であったフリードリヒ 2 世（在位 1545～1556 年）によって宗教改革が始まっていました。それが本格化したのは、後のフリードリヒ 3 世（在位 1559～1576 年）の時代で、彼は聖餐論において混乱²したプファルツ国内のプロテスタント教会の一致を目指し、改革派（カルヴァン主義）の信仰こそが聖書的であるとの確信に基づいて、『ハイデルベルク信仰問答』の出版に向かったのです。この信仰問答書の作成にあたって、当時の名だたる神学教授、監督、牧師が総動員され、1563 年

¹ 選帝侯とは、神聖ローマ帝国において、ローマ王（ドイツ王）すなわち神性ローマ帝国の君主に対する選挙権（選帝権）を有した諸侯のこと。（Wikipedia）

² 主の晩餐において「これはわたしのからだである」「これはわたしの血である」という主イエスのことばをどう解釈するかにおいて、ルター、ツヴィングリ、カルヴァンらの間で論争が激化した。

に初版が出版されました。

この信仰問答書の目的は主に3つあると言われます³。

- ① 子どもたちを教えるためのカテキズム教育の教材
- ② 教会で普通の人々を指導するための説教のガイド
- ③ プファルツにあるいくつかのプロテスタント諸派のための信仰の一致のかたち

「子どもたちを教えるため」と言いましても、その内容がすべて簡単だというわけはありません。大人も含め、「基督教の信仰とはどういうものなのか」と問われたときに明確に答えられるようにするための立派なテキストです。それは、受洗に先立つ知的な聖書理解（福音理解）とも言えます。そして、教理を理解することによって、講壇から語られる説教がよく理解できるようになり、様々な場面で使われる専門用語にも適応できるようになります。

そういえば、私は高校生くらいまで、父親の説教をどんなに一生懸命聞いても理解できなかったことを覚えています。それには二つの理由があったと思います。第一に、子どもに分かる言葉で語ってくれていなかった（内容が難しすぎた）こと。第二に、自分の中で聖書の教理が確立していなかったことです。「教理」と聞くだけで「難しそう」「お堅そう」とアレルギー反応を起こしてしまう人もいるかもしれませんが、私たちの信仰の基礎を築き上げるためには不可欠なものです。これによって、私たちは何を宣べ伝えればよいのかが分かるようになり、異端を見分けられるようにもなるでしょう。

ハイデルベルク信仰問答第一問は「**生きている時も、死ぬ時も、あなたの唯一の慰めは何ですか**」という問いで始まります。これは、この問答書全体が向かっていく方向性であり、ひたすら「慰め」の根拠を問い続ける書であると言えます。それにしましても、なぜ「慰め」なのでしょう。「喜び」とか「希望」とか、別の言葉を入れたとしても成り立つ一文です。しかし、著者は「慰め」を選択しました。そして、これはキリスト者全体に対する問いであると同時に、すべての人間が必要としているものとして呈示されているのです。

このように、最初に人生の目的を問う書き出しは、当時の信仰問答書に共通した方法でした。幾つかの実例を挙げてみましょう。

ウエストミンスター小教理問答

問1 人のおもな目的は何ですか。

答え 人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことです。

³ カルヴァン神学校のライル・D・ビエルマ教授による説明。

問1 人生の主な目的は何ですか。

答え 神を知ることであります。

人生の目的が問われるとき、私たちは瞬時に答えることができるでしょうか。年代にもよりますが、人は若ければ若いほど、どのように自己実現をするかということばかりを考えているかもしれません。自分はこういうことを成し遂げたい。生きている間にこれだけはやっておきたい。私たちキリスト者にも、もちろんそういう願望はあると思います。しかし、それは必ずしも実現に至らないかもしれません。

そこで、私たちはハイデルベルク信仰問答の著者が前提として読者に問うている事柄に、もう一度耳を傾けてみたいのです。それは、「あなたの唯一の慰めとは何か」ということです。「慰め」こそが、すべてにまさって必要なものだと言われているのです。言葉の裏を読めば、如何なる自己実現も「慰め」に代えられるものではないということになるでしょう。では、ここで言われている「慰め」とは何であるか。

この書が書かれたドイツ語では「Trost」という言葉が使われているようです。基本的な意味は「慰め」「慰安」「励まし」ですが、翻訳者たちは実に色々な意味をそこに当てています。吉田隆は「私たちの心を置くべき拠り所、確信、あるいは助け」、「自分が全幅の信頼を置くべき、私たちが体も魂も全部任せてよいという、その拠り所」と説明しています。楠原博行は「確信」「^{くすはら}勇氣」「希望」「助け」「守り」「力」という幅広い意味が当てられると言っております。全体として捉えていきますと、この「Trost」とは、「私たちが最終的に依り頼むもの」と言うことができるでしょう。私たちが生きているときも、死に際にも、如何なるときにも依って立つもの。まさに、この人生で一番大切なものです。

ハイデルベルク信仰問答の重要な特色の一つは「聖書に密着した信仰問答」であるということです。どの回答にも聖書的根拠がある。問1の答えの背後にも幾つかの聖句が隠れています。第一に挙げられているのは、ローマ 14:7-8 です。

私たちの中でだれひとりとして、自分のために生きている者はなく、また自分のために死ぬ者もありません。もし生きるなら、主のために生き、もし死ぬなら、主のために死ぬのです。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。

「私たち」とはキリスト者を指しますから、「キリスト者とはこういうものだ」「こういう生き方をする存在だ」ということが言われていることになります。つまり、キリスト者は自分のために生きているのではなく、自分のために死ぬのでもない。これは、人間

の基本的な生き方とは真逆と言えるかもしれません。現代世界の風潮を見ますと、自国中心主義に支配されているように感じられる。如何に自分たちを繁栄させるか。他国との関係は二の次となる。同じことが個人レベルでも言えそうです。俺の人生は俺のもの。自分らしい人生を送るということを第一に考える。自己実現のためには何が必要か。実力、あるいはお金か…。

しかし、奥村修武は驚くべきことを言っているのです。「自己実現をそれ自体として目指す者、あるいは自己実現を自己実現として目指す者は、自己実現に至らない」と。言い方を変えると、自分のことばかり考え、自分らしい人生を送ることだけに終始すると、かえって本当の意味での自己実現が失われていくということです。人間とはそういう存在であるようなのです。では、何が人間を「真の自己」に至らせるか。それは反対に、自分を捨て、自分の十字架を負うことによってなのです。神に仕え、人に仕えることが、本当の意味で自分を構成していく。

いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音とのためにいのちを失う者はそれを救うのです。(マルコ 8:35)

自分のいのちを守る、つまり自分自身に仕える者は、結果として自分を失ってしまう。なぜか。それは、私たちが生まれつき向かっている方向が「死」だからです。「死」とは「いのち」と激しく対立するもの。その「いのち」の源とは神であり、人間はこの「神」のために生きるときに「生きるもの」となるのです。「神に背を向ける」ことが「罪」であるならば、人間は罪に支配されていることになる。そして、神に背を向けた人生を歩み続ける先に「死」が待っているというのは、当然の論理でありましょう。

ですが、キリスト者はもはや「自分のために生きる」ことをやめてしまった者たちなのです。では、誰のために生きるか。神のためです。あくまでも神に喜ばれるように、神に自分自身をささげていく。その具体的な表れが人に仕えることであります。

もし生きるなら、主のために生き、もし死ぬなら、主のために死ぬのです。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。

ここで言われている「生きる」「死ぬ」という言葉は、私たちの人生全体を言い表している。人間全般は、生きることにこそ価値を置くでしょう。不老不死の薬を探し求めた秦の始皇帝は、死をどこまでも恐れていました。この世で絶大なる権力を手に入れ、3000 人もの側女をはべらせた彼も、死の前には為す術がありませんでした。しかし、キリスト者はそうではありません。死ぬことさえも栄光と結びついているのです。その栄光は、自分の栄光ではなく、神の栄光です。生きることも神のため。そして、死ぬことも、神の栄光を表す機会となる。それは、キリスト者が神のもの、キリストのものとなっているからなのです。

ハイデルベルク信仰問答の著者は、このことを「慰め」と呼びました。私たちが永遠にキリストのものであること、何者も私たちを神から引き離せないということを「慰め」と呼んだのです。「慰め」という言葉は、ギリシャ語では「パラクレートス」(παράκλητος)と言います。これは「傍に呼ぶ」という意味をもつ言葉で、キリストが私たちをご自分の傍に招き、どんな反対者・告発者も太刀打ちできない弁護者となって、私たちを守ってくださることを言い表しています。私たちはこの人生において、弁解の余地なき罪を抱えてきました。私たちが行なったこと、語ったこと、思ったことのすべては、終わりの日に神の御前に明らかにされます。そして、神はこの世のすべての真実を、すべての人の前で明らかにされるでしょう。その日、一体誰が「自分には罪はない」「恥ずかしい部分の一つもない」と言い得るでしょうか。私たちの人生には多くの「悔い」があるのではないかと。しかし、キリストはそんな私たちの弁護者となってくださいます。私たちのすべての罪を覆い隠し、ご自分の義において私たちを「無罪」と宣言してくださる。「この人の罪は、私の十字架において既に審かれています。この人は私の義において無罪です」と。

私たちはこの方と出会い、この方に招かれ、この方に仕えるようになりました。もはや、この人生は自分のものではなく、キリストのものとなったのです。そして、まことに不思議なことなのですが、キリストのために生きるときに、私たちは本当の自分になっていく。キリストがすべての人に仕えられたように、私たちもまた隣人に仕える者となる。仕えることこそが、人間の真の姿であり、目的なのです。

ハイデルベルク信仰問答の問1の答えは、実際にはまだ続いていきます。ですが、今日は最も原則となる回答部分だけを扱いました。私たちにとっての「慰め」とは何か。それは、「**生きている時も、死ぬ時も、身も魂も、私自身のものではなく、私の信頼する救い主イエス・キリストのものである**」ということを感じるためです。

【祈り】

慰め主なる神よ。私たちに「人生の目的」を示してくださったことを感謝いたします。私たちの人生はもはや自分自身のものではなく、これを与えてくださったあなたのものとなりました。私たちは生きるにも死ぬにも主のものです。そして、主イエスが私たちに仕えてくださったように、私たちも神と人とに仕える者になりたいと切に願います。そのように生き得る者となし、私たちに「真の自己」を形成させてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

人の人生の目的そのものとして、ご自身を示し給う、父なる神の愛。

誰にも先立って人に仕え、我らをも仕えることを通して「真の自己」に至らせ給う、主イエス・キリストの恵み。

罪人を傍に呼び寄せ、終わりの日の弁護者、そして慰め主となり給う、聖霊の親しき交わりが、

我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。